



●
Opera チューリヒ歌劇場
《魔弾の射手》

アンドレアス・ホモキが総裁となって3シーズン目のチューリヒ歌劇場は、9月17日のオープンドアで盛況を誇った翌日、ウェーバー《魔弾の射手》で新シーズンの幕を開けた。

演出家ヘルベルト・フリッチュの舞台装置やペーアの衣裳はカラフルで、オープニングにふさわしい期待感を持たせたが、オレンジの衣裳をつけ、エキストラに担がれてカーテンコールに登場したフリッチュは執拗なブーを浴びた。先シーズンでの《アーサー王》同様、演劇畑の臭いが強く、セリフで叫ばせたり、ふざけ過ぎて下品な部分もあるが、個人的には許容範囲内に収めている印象を受けた。最後にサミエルがアガーテのスカートの中に入って煙と化し、アガーテの不気味な笑いで暗転となる幕切れは心地良いものではないが、保守的なこのオペラについてじっくり考えさせる効果を与えた。

Scramble Shot

指揮者マルク・アルブレヒトの音楽作りは従来の慣習にとらわれない、彼独自の明確なコンセプトを提示していた。長いスパンでのクレッシェンドや、自由自在に変化するテンポも効果的であったが、オーケストラがついて来られない部分もあった。クリストファー・ヴェントリスはマックスを無難にこなし、リーゼ・ダヴィドセンは硬さが残るものの興味深い声で新しいアガーテを聴かせた。メリッサ・プティットのエンヒェンは小粒ながら安定した歌唱で、カスパーのクリストフ・フィッシュエッサーは気管支炎のため、控えの歌手が待機していたが、無事に歌い切った。観客全員が音楽的には満足し、常連大御所指揮者の時のような拍手を贈った。(中東生)



チューリヒ歌劇場《魔弾の射手》から。中央、ダヴィドセン演じるアガーテ、右、プティット演じるエンヒェン
©Hans Jörg Michel.